

はじめに

荻間澤 勇人

1 本論文の目的と意義

本論文は「アカデミック・スキル1」の指導について評価し、次年度以降の改善に役立てることを目的としている。「アカデミック・スキル1」と「アカデミック・スキル2」は、2018年度からが“基本推奨科目”として開講された。この科目は、数年前に検討した「初年次教育」の議論を踏まえながら、2017年度まで実施されていた「文章表現法」の内容と科目名をリニューアルしたものである。2018年度からの学部カリキュラムの導入に対応して1回目の実施だったので、手探りであっても、授業の効果を検討することは、次年度への改善には欠かせない取り組みであり、そこに本論文の意義が十分に認められる。

2 本論文の構成

本論文は、本学におけるアカデミック・スキルに関する総論論文1本、アカデミック・スキル1の学生評価を用いた効果測定論文1本、授業における特徴的な取り組みを紹介する実践論文2本、計4本の論文から構成されている。その論文題目と担当者、主たる内容は以下のとおりである。

2.1.はじめに（荻間澤勇人）

ここでは本論文の目的と意義、構成、本論文を受けての今後の取り組みが述べられる。

2.2.教養科目アカデミック・スキル1の概要（菊地則行）

ここでは文化研究センターが中心となって「アカデミック・スキル」を開講することになった経緯の他、アカデミック・スキルのカリキュラム上の位置づけ、授業目標、教材、アカデミック・スキル2との関係について言及される。

2.3.教養科目アカデミック・スキル1における学生の自己評価と授業実践（蛭名正司）

ここではアカデミック・スキル1の授業実践について、その授業効果を学生の自己評価に基づいて検討されるとともに、つぎの2つの授業実践報告と学生の自己評価との関連が検討される。

2.4.論理的思考教育を基礎とするパラグラフ・ライティングの段階的指導—実践報告1（菊地則行）

ここではグループ内での意見交換・発表を重視するとともに、パラグラフ・ライティングの指導において「作業シート」を用いて課題レポートを段階的に作成するという教育実践が報告される。

2.5.長めの論証文作成に力点を置いた授業—実践報告2（青木滋之）

ここでは学術論文の体裁に従って、3200字以上の長い論証文を、ペアワーク（話し合い）を踏まえて書くという教育実践が報告される。

3 今後の取り組み

アカデミック・スキル1について、継続的に授業評価を行い、常に改善を繰り返してよりよい授業ができるようにしていくことが求められる。そして、菊地論文に示されるように“文化研究センター”の最も中心的な科目として位置づくようにしていきたい。あわせて、各教官が自身の専門性を高めるとともに、アカデミック・スキルの指導の専門性も高めることが求められる。